

お客様のご紹介

MAILING
メールマガジン

CONTACT
コンタクトサービス

NATIONAL FLAG
ナショナルフラッグ

LOGISTICS
ロジスティクス

DIGITAL
デジタルサービス



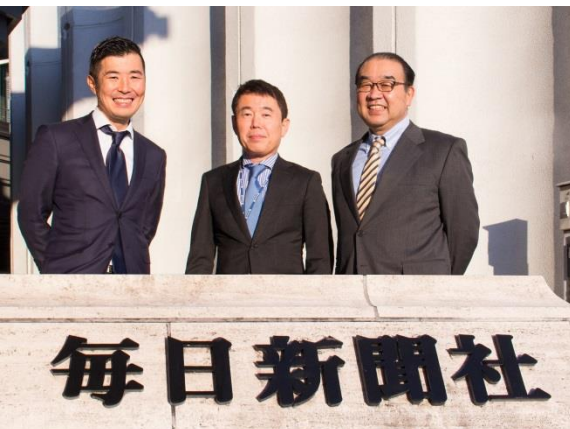
株式会社 毎日新聞社 様

毎日新聞は創刊1872年(明治5年)2月21日であり、現存する「日本最古の日刊紙」です。

事業内容は、日刊新聞の発行の他、雑誌や書籍の発行、デジタルメディア事業の展開、スポーツや文化事業の企画開催、その他各種の事業を展開。「報道に近道はない」を合言葉に、ねばり強い取材活動で、「毎日ジャーナリズム」を実現しています。

また、新聞協会賞(編集部門)の受賞では、最多記録を更新しており、2017年度の同賞でも「ボルトも驚く 日本リレー 史上初の銀」が選ばれています。

ホームページ: <https://www.mainichi.co.jp/>



株式会社 毎日新聞社

- ・オリンピック・パラリンピック室
室長 野村 隆宏 様(右)
- ・オリンピック・パラリンピック室
次長 佐藤 正明 様(中央)
- ・オリンピック・パラリンピック室
主任 鈴木 大介 様(左)

<毎日新聞社様のトピックス>

毎日新聞社は、平成29年度新聞協会賞(編集部門)で最多となる29回目を受賞しました。スポーツ写真が受賞するのは初めてです。「報道に近道はない」を掲げる毎日ジャーナリズムを実践。業界最多の新聞協会賞受賞歴は取材力の証明です。

毎日新聞としてメッセージ性のある取組

アテナにご委託頂いた業務内容を教えてくださいませんか？

今回ご依頼したのは、2017年10月28日から11月5日までの9日間、毎日新聞の東京本社ビルであるパレスサイドビルに206の国と地域の国旗を掲出する業務です。

私たちが協賛している事業をPRしていく中で「インパクトのあるもの」、「他社がやっていないようなこと」をしかも、ただ単に目立つだけでなく、「毎日新聞としてしっかりとメッセージ性のあるもの」として取り組みたいと考えました。

そんなときに、1964年の東京を撮影したある1枚の写真を見つけ「毎日新聞の東京本社ビルを国旗でデコレーションしたら、SNS等で話題になるのでは？」と考え、アテナさんにご依頼し、前述の国旗掲出が実現しました。

毎日新聞は、「世界は一つ」として平和の祭典に向けたメッセージを発信すると共に、2022年に創刊150年を迎える全国紙として、2020年だけでなく、それ以降の社会に向けて何ができるのか、を考えていきます。



なんとか実現させたいという熱意

アテナにお声掛け頂いた経緯をお聞かせください。

知人を通じてご紹介いただいた、国旗専門家・吹浦忠正先生(NPO法人世界の国旗研究協会会長・理事長)にご相談したところ、「国旗のことならアテナさん」とご紹介いただきました。

最初にお話をさせていただいた段階では、そんなに難しいことではなく、紐や結束バンドで留めればできるかな、と、楽観視していました。しかし、国旗という性質や仕上がり具合、安全面などを考えていくと、難しい条件が次々と現れ、しかも、毎日新聞やパレスサイドビルとしても初めての取り組みとなり、まったく前例のない中で進めていくのは、思った以上に困難なことでした。

選定頂いた理由は何だったのでしょうか？

この事業を毎日新聞として実施するにあたっては、「アテナさんしかいない」と考えておりました。逆に、「アテナさんでダメならあきらめよう」とも。

これまでのご経験や国旗に対する知見、そして、何よりも「なんとか実現させたい」というご担当者の熱意が伝わってきたのが、選定した最大の理由であり、一番嬉しかったことでもあります。



アテナさんでなくてはできなかった事業

アテナの印象や評価を教えてくださいませんか？



今回の事業はアテナさんのご担当者や毎日ビルディング(東京本社ビルの管理業務担当事業会社)の知恵や熱意によって、一つ一つクリアできたと考えております。技術的なことはもとより、「なんとか実現させる」という思いに支えていただきました。そして、やはり「アテナさんでなくてはできなかった」事業だったと、改めて感じていますし、実際に一つのミスもなく完璧に仕上げていただきました。

東京本社ビルに206枚もの国旗が掲出された瞬間は、私たちも言葉にできない感動がありましたし、観光客や皇居ランナーがSNSで発信したりと、社内外で大きな話題にもなりました。

今回は、アテナさんにとっても、部署の枠を超え、全社でお取り組んだいたと伺いました。毎日新聞としても、今回の事業を一つの事例として、来年・再来年とさらにパワーアップした事業展開を図ればと考えています。

提供＝毎日新聞社